

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：35404

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23355

研究課題名（和文）モザンビーク共和国における大学生の援助要請行動

研究課題名（英文）Help-seeking Behavior of University Students in Mozambique

研究代表者

隅田 姿（Sumida, Sugata）

広島修道大学・国際コミュニティ学部・准教授

研究者番号：80843804

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はモザンビーク共和国における大学生が、困った時に誰かに助けを求めているかどうか（援助要請）について、その傾向や理由を明らかにすることを目的とし、177名の質問紙結果を元に分析を行った。その結果、援助要請行動は問題の種類によって異なり、学習意欲や日常・将来に関する問題については援助要請をしないが、学習内容に関する問題については要請する傾向が明らかになった。また男女での援助要請の差はないが、年齢が高い学生ほど援助要請をしないということも確認できた。援助要請をしない理由としては、自分で解決したいというポジティブな動機と低い能力を隠したいというネガティブな動機があることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は欧米を中心とした援助要請の研究分野においてアフリカのモザンビークというデータが希少な国で一次データを収集し、その援助要請を明らかにした点である。また援助要請研究は医療分野を対象にしたものが多い中、教育分野を対象にした点においても学術的な意義がある。社会的意義としてはモザンビークの大学における学生支援の改善へ貢献をしているところである。モザンビークの大学生が助けを求めない理由には、自分で解決したいか自分で解決できないことを隠したい、という2つがあるため、学生支援においては彼らの自助努力を尊重しながら、一方で自尊心が低い学生が助けを求められるような体制が必要であると示した。

研究成果の概要（英文）：The study aimed to examine the help-seeking behaviour of university students in Mozambique by using the survey data of 177 university students in Mozambique. The analysis showed that whether students seek help or not depends on the type of problem. The students tend not to seek help for problems related to learning motivation or daily life and future, whereas they tend to seek help for problems related to learning content. The results also showed that the degree of help-seeking was not different between males and females but by age. Older students are likely to hesitate to seek help compared with younger students. The results further showed that reasons for not seeking help include both positive and negative motivations; they want to solve problems independently or hide their low abilities.

研究分野：比較教育

キーワード：援助要請 援助行動 モザンビーク 大学生

## 1. 研究開始当初の背景

モザンビーク共和国(以後、モザンビーク)の大学生は、学業、健康、家族、友人など様々な問題を抱えているが、多くの学生がそれらの問題を相談できていない。一般に、大学生が問題やストレスを抱え、誰かに相談できない場合はバーンアウトを起こしやすいとされている(田中・石隈 2001)。モザンビークの大学生たちが、なぜ相談をしないのかという疑問についての研究は、これまでされていなかった。その理由としては大学生に関する蓄積データがあまりなかったことやデータが収集しにくいこと、また学生支援のシステムもまだ十分に整備されておらず現場からの要請がほとんどなかったことが考えられた。

困っている人が他者に助けを求める動機や行動については欧米を中心に多く行われてきていた。それは援助要請と呼ばれ、既存研究では援助要請と問題の種類、援助要請をためらう人の傾向、援助要請をしない理由などが検討されてきた。具体的には、問題の種類については、人間関係に関する問題については援助要請をするが、家族に関する問題については援助要請をしない傾向がある(Boldero & Fallon 1995)ことや、女性よりも男性の方が、また年齢が高い人の方が援助要請をしない傾向がある(Nam 他 2010)こと、自己開示をする人よりもしない人の方が援助要請をしない傾向がある(Tuhuisu 他 1990)ことなどが分かっていた。また、援助要請をしない理由には、自分の能力の低さを隠したいという後ろ向きの動機とともに、自分で解決したいという前向きの動機がある(Nelson-Le Gall 1981)ことも分かっていた。

このような知見は欧米の学生を対象にしてきてものであり、抱えている問題や大学や日常生活の環境などモザンビークの大学生を取り巻く環境とは様々な面で異なっていることが想定されることから、モザンビークの大学生の援助要請の現状については不明のままであった。

## 2. 研究の目的

上記のような背景のもと、本研究ではモザンビークにおける大学生の援助要請の状況を明らかにすることを目的とし研究を行った。具体的には、モザンビークの大学生はどのくらいの学生が援助要請をしていないのか、どんな問題について援助要請をしていないのか、どんな学生が援助要請をためらっているのか、援助要請をしていない学生はなぜしていないのか、という質問に答えていくこととした。

## 3. 研究の方法

本研究のサンプルは、首都マプト市の7つの高等教育学校・大学にいる学生とした。モザンビークには全国24の大学があり、そこに約45,000人の大学生がいると推定されている。大学生の多くは首都マプト市にある大学に通っている。大学生の平均年齢は24歳で、8割が自宅から通い、残りの2割が寮に入っている。学生の約半分はフルタイムの学生であり、もう半分は仕事をしながら通っている。学内において学生支援をする専門部署や体制は、一部の私立大学を除くとほぼ存在しておらず、またサークルや部活などの学内活動もほとんどない。

研究方法としては、モザンビークにおける大学生の援助要請についての既存研究が見当たらなかったため、聞き取り調査により仮説を生成し、その仮説について質問紙調査を使って検証するという2段階の方法を用いた。第1段階では11名の大学生に対して聞き取り調査を行い、彼らが日ごろ困っている時に相談するかどうか、誰に相談するのか、なぜ相談するのか、または相談しないのかについて聞き取った。それらの回答をまとめたところ、相談相手については友達、教員、家族、他人(特に海外のボランティアなどの専門家)という回答が得られた。そして、大学生が抱えている問題については、授業に集中できない、授業が分からない、授業中のワークが少ない、友達ができない、将来に不安があるなど12の問題が発見され、援助要請をする(またはしない)理由と関連しそうな要因についても、恥ずかしい、最後の手段にしている、自分で解決したいなどなど16の要因を特定できた。

次に第2段階として、第1段階で特定した、大学生が抱える問題、相談する相手、援助要請に関わる理由に、学生の背景情報を加えた質問票を作成し、モザンビークの大学生177名に回答してもらった。援助要請に関わる理由についての回答には5階のリッカート尺度を用いた。質問票はその後、集計をし、STATAという統計分析ソフトを利用し主成分分析を行った。

## 4. 研究成果

分析の結果、モザンビークの大学生における援助要請について以下のことが明らかになった。

1つ目に、モザンビークの大学生において、援助要請をしない割合は約12%で、その中で全く相談しないと答えたのは3%いた。つまり、8人に1人の大学生はほとんど相談をしておらず、30人に1人は全く相談していないことが分かった。2つ目に、彼らはどのような問題について援助要請をしないのかについては、特に日常や将来に関する問題については相談をためらう傾向があることが分かった。特に、友達に関すること、将来への不安の悩みについては半数程度の学生は誰にも相談していない。他方、学習意欲や学習理解の悩みについては比較的、相談が出来ていたが、それでも学習意欲が湧かない、授業に集中できないというの悩みについては3割程度、

授業でしっかり学べていない、先生の言っていることが分からないという悩みについては 1 割程度の学生が相談していなかった。3 つ目に、どのような学生が援助要請をしないかについては、年齢が高い学生は相談しない傾向があることが分かった。これは 25 歳までの大学生については特に差はなかったが、35 歳以上の大学生については援助要請をしない傾向が非常に強くなっていた。他方、男女間での援助要請には差はなかった。最後に、援助要請をしない理由については、自分で解決したいというポジティブな動機と自分の低い能力を隠したいというネガティブな動機の 2 つを確認することが出来た。学習意欲や学習理解については、特にネガティブな動機の方が強く関連しており、学生らは学習に関してプライドを持っており、自分が理解する能力がないことを隠すために相談できずにいることが示唆された。

以上の結果は、おおむね既存研究と一致していた。つまり、大学生は個人的なことを他人に相談しない傾向があり、年齢が高い人ほど援助要請をせず、自己開示をしにくい人ほど援助要請をしない傾向があることが、モザンビークの大学生においても確認できた。ただし、既存研究が対象としている欧米の大学生が通う大学では学習支援やメンタルカウンセリングなどの学生支援が充実している一方で、モザンビークの大学生が通う大学ではそのような支援体制は整っておらず、相談する場所やそれが促進される環境があった場合には、援助要請をする学生の割合は上がる可能性もある。ともあれ、以上の結果は、学生支援の体制が整備されていないモザンビークの大学においても、欧米諸国で蓄積されてきた学生支援の知見をおおむね取り入れることができることを示唆している。

本研究では、モザンビークの大学生における援助要請に関して、援助要請志向の傾向、援助要請をしない問題の種類、援助要請をしない学生の傾向、援助要請をしない理由について解明した。研究の学術的意義としては、欧米を中心とした援助要請の研究分野においてアフリカのモザンビークというデータが希少な国で一次データを収集し、その援助要請の現状を明らかにしたことである。また援助要請研究は医療分野を対象にしたものが多い中、教育分野を対象にした点においても学術的な意義がある。また、社会的意義として、本研究はモザンビークの大学における学生支援の構築および改善に貢献をしている。モザンビークの大学生が助けを求めない理由には、自分で解決したいか自分で解決できないことを隠したい、という 2 つがあることから、学生支援においては彼らの自助努力を尊重しながら、一方で自尊心が低い学生が助けを求められるような体制が必要であると示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 隅田姿
2. 発表標題 モザンビーク大学生の援助要請
3. 学会等名 第57回大会 日本比較教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------